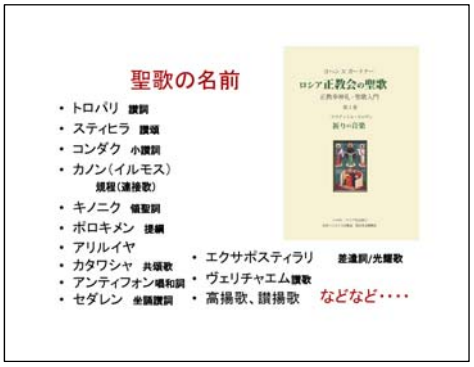
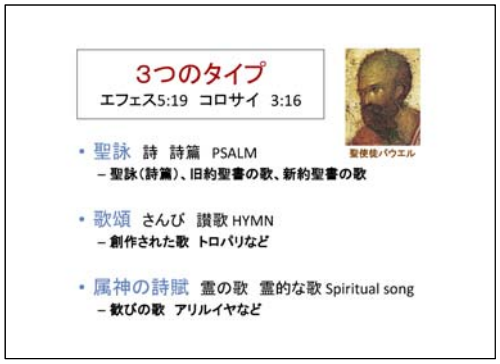
S.1
奉神礼基礎講座
「正教聖歌の伝統」シリーズ
第５回　聖歌の「お名前」１.「トロパリ」徹底解明

S.2
聖歌の「お名前」って、たくさんあるの、ご存じですか。トロパリ、讃詞、スティヒラ、讃頌、コンダク小讃詞、カノン・・・色々ありますね。トロパリとかスティヒラとか聞いたことはあっても、どう違うかということはあまりご存じではないと思うので、これから 3 回、聖歌を代表する三つの歌の種類、トロパリ、コンダク、カノンを徹底解明します。今日はその第１回で「トロパリ」です。



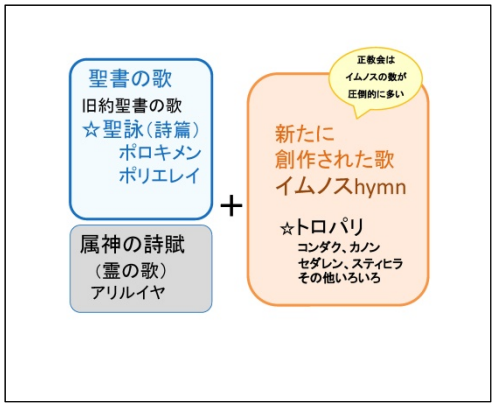
詳しいことは西日本教区で出版した『ロシア正教会の聖歌』をご覧ください。1300 円です。私は 30 年前にこの本の英語版に出会って、謎が解けました。正教聖歌の入門書として世界的に読まれ、信頼されている本です。

Slide 3
さて、聖歌の「お名前」について最初に言及しているのは聖使徒パウエルです。エフェス人への手紙、コロサイ人への手紙で、「聖詠と、歌頌と、属神の詩賦を以て主を讃美せよ」と言っています。口語訳では「詩とさんびと霊の歌」です。



聖詠はわかりますよね、聖詠（詩篇）。加えて、ほかの旧訳聖書の歌も含まれます。
ここでいう歌頌とは、英語で hymn、新約の時代になって、新しく創作された歌をいいます。ギリシア語でイムノス、聖歌の大半がここに入ります。
属神の詩賦はたましいの歌、スピリチュアルソング、アリルイヤなど、ことばに表せない歓びの歌です。
パウエルはこの時、三つを明確に区別していたわけではないと言われますが、聖歌はだいたいこの三つに区分されます。
このなかで最初の二つ、「聖詠」と「歌頌」について見ていきます。

S4.
今まで、正教聖歌は「ことばを歌う」もの、音楽は「歌詞のことば」を乗せる乗り物、「ことば」を入れる容れ物だとお話してきました。聖歌の素材、歌詞となっている「ことば」から見ると、大きく二種類に分けることができます。
ひとつは聖書から直接取られたもの、主に聖詠（一般に詩篇と呼



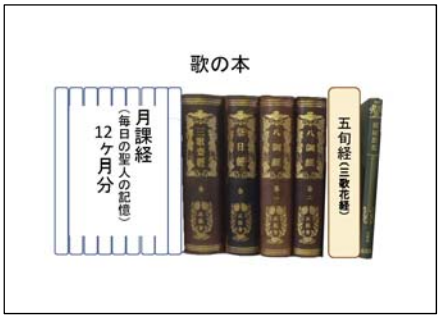
ばれるもの）と旧約聖書の歌です。大部分は聖詠です。昔の修道院では旧約聖書の歌も聖詠に含めていました。

聖詠のことばをそっくりそのまま歌詞にしたものとしてはポロキメン、キノニク（領聖詞）、ポリエレイなどがあります。

新約の教会になって「新たに創作された歌」、トロパリ、スティヒラ、コンダク、カノンなど、私たちの教会の師父、先祖たちが、インスピレーションを受けて、神の聖神を受けて、歌いました。だからイコンでは巻物を口に入れられている図で描かれることもあります。彼らは今で言う、シンガーソングライターです。聖歌は歌う説教であり、教義や信仰の道を歌で教えました。奉神礼という特別の場所、特別の設定の中で歌われ、表され、伝えられてきました。西方教会と比べると正教会ではこの「イムノス」新しい歌の数が比較にならないほど多いのです。

S.5

これらの創作聖歌を収めた本が『八調経』『祭日経』『三歌斎経』『五旬経』などの分厚い祈祷書です。ほかに聖歌者用の『連接歌集、イルモロギオン』も日本語に訳されています。訳されていないものとして毎日 365 日の聖人の記憶のための『月課経』と「略」ではない『五旬経』です。日本では歌わないで「読む」ことが多いので、歌の本という認識はないですが、本来「歌を集めた本」です。それが証拠に『三歌斎経』と『連接歌集』には「歌」の文字が入っているし、『八調経』の「調」は音楽の「しらべ」です。



S.6

さて、最初の頃の創作聖歌は短い、4 行か 5 行の節がひとつだけの簡単な歌でした。これがトロパリです。トロパリ、ギリシア語で Troparion、日本語で讃詞と訳されています。トロパリは正教の創作聖歌の原点、出発点で、スティヒラ、コンダク、カノンなど他の聖歌もトロパリの応用、トロパリを複合形、トロパリと聖詠の組み合わせ方を発展させたものです。だから創作聖歌の大半は、核となる詩の形からみればトロパリです。

S7.

ところが聖歌の「お名前」には詩の形だけでなく、他の理由から名付けられたものもあります。奉神礼上のどんな場面で歌われるかによって名付けられたものとしては「キノニク（領聖詞）」、領聖するときの歌だから領聖詞、歌詞は聖詠です。これはわかりやすいですね。ほかによくあるのが歌詞の冒頭、一部から名前がついているものがあります。たとえば「常に福」とか「天の王」などがあります。「常に福」や「天の王」は詩の形はトロパリです。

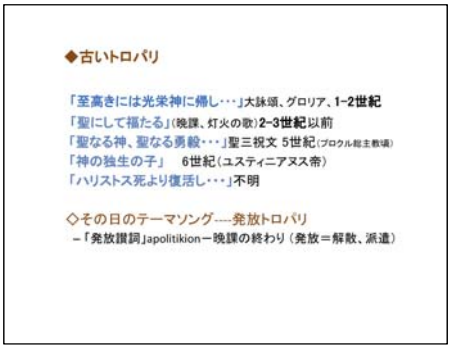
それから、歌うときの聖歌隊の隊形、立つ場所、人々の姿勢などから名付けがついたものがあります。たとえば、セダレンは「すわる」の意味、カタワシャは「聖歌隊が集まって歌う歌」の意味、エクサ

ポスティラリーは「派遣する」という意味で、ソロの歌手を真ん中へ「派遣します」、アンティフォンは「右左の聖歌隊に分かれて、掛け合いで歌う歌」です。

S8.

だからある歌が、詩の形から見ればトロパリですが、同じトロパリが、あるときはアンティフォンと呼ばれ、あるときはセダレンと呼ばれるという怪人二十面相みたいなことも起きます。

S.9



さて、トロパリの中で最も古いと言われるのが、晩課の「聖にして福たる」、これは 4 世紀より前、多分 2-3 世紀から歌われているとされます。「正教聖歌の伝統」のシリーズ３で詳しくお話しました。「至高きに光栄神に帰し～」で始まる大詠頌、西方ではグロリアと呼ばれる歌も古いトロパリです。冒頭の「至高き･･･」は新約のルカ伝から取られていますが、聖書を引用して歌を作ったと言うより、むしろ、当時歌われていたものが聖書に収録されたと考えられます。大詠頌とグロリアについてはシリーズの 4 をご覧ください。

「聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐れめよ」聖三の歌、これもトロパリです。5 世紀ごろと言われます。「神の独生の子、並びにことばや」6 世紀の皇帝ユスティニアヌスが民衆に正しい教義を教えるために作りました。あと、いつから歌われているかわからないくらい古いのがパスハのトロパリ「ハリストス死より復活し」。いずれもキリスト教のごく初期から、今まで、歌い続けられています。

ところで、みなさん、一般にトロパリというと、主日トロパリとか祭日トロパリとか、その日のテーマソングと理解されていると思いますが、これはトロパリの中で、発放トロパリ（発放讃詞）ギリシア語でアポリティキオンと呼ばれる特別のトロパリです。「発放」とは「出て行く、派遣される」の意味です。晩課の終わり、集まりが解散するときに歌われる歌で、その日のテーマを表します。晩課は重要な礼拝でした。

S.10

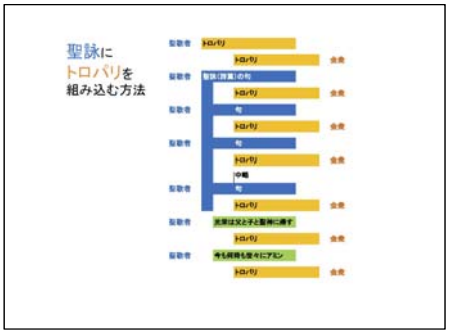
さて、トロパリがどんなふうに歌われたかをみていきます。前に、ビザンティンの聖歌の伝統には大聖堂の伝統と砂漠の修道院の伝統の二つの流れがあって、二つの伝統は 7 世紀ごろから統合されたとお話ししましたが、トロパリなど「創作聖歌」は街の大聖堂で発展したものです。砂漠の修道院では「歌」は心を迷わせると言って、排除されていました。修道院が聖歌作成の中心になるのは 7 世紀よりあとのことです。砂漠に入る修道士たちは聖詠を暗記して、ひたすら聖詠を唱え続けました。砂漠に本は持っていけませんから、覚えるしかありませんでした。

S.11

街の教会、大聖堂ではトロパリが歌われました。迫害が終わり、帝国の国教になると、あまり熱心でない信者がふえました。そういう人を教会に引き寄せ、教えを正しく伝えるために歌を利用しました。教義を歌

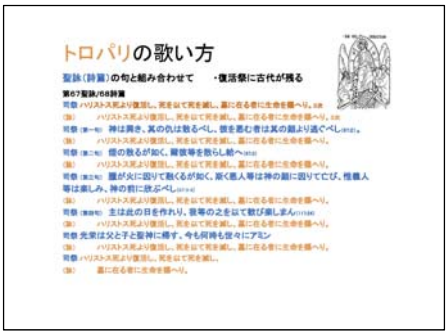
にして教えました。行列を作って歌いながら、ねり歩いて教会に向かいました。「十字行」の原型です。どのように歌ったかというと、聖詠を句に分割して、トロパリを挟み込んで歌いました。聖歌者はプサルティスと呼ばれます。プサルムとは聖詠の意味で、聖歌者は聖詠を歌える人、つまり聖詠を覚えている人でした。昔の人は何でも覚えました。専門職の聖歌者が聖詠を歌い、会衆は簡単なトロパリを繰り返しました。

S.12



図解するとこうなります。青い部分が聖詠、黄色がトロパリです。まず、プロの聖歌者がトロパリを何回か歌う。短い歌だから 3 回も聴けば覚えられますね。次に会衆が覚えた歌を繰り返す。次に聖歌者は聖詠の句を歌う。会衆はさっき覚えたトロパリを繰り返す。聖歌者はまた次の聖詠の句を歌い、会衆はトロパリを歌う・・・何か思い出しませんか。そう復活祭の始まりの部分です。

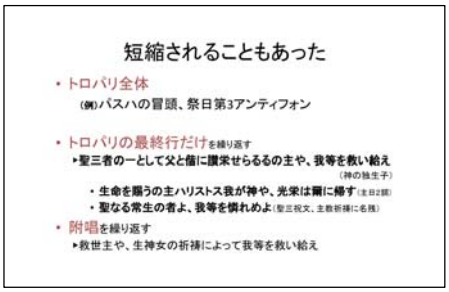
S.13



今は司祭が歌いますが、かつてはソロの聖歌者が歌いました。「ハリストス死より復活し」を 3 回歌い、聖歌隊と会衆が 3 回繰り返し、次は 67 聖詠の句「神は興き、その仇は散るべし」と歌い、会衆は「ハリストス死より」を繰り返します。

大斎から復活祭、五旬祭までの期間にはビザンティンのもっとも古い要素が残っているので、とても面白いです。

S.14



こうして聖詠にトロパリを挟み込んで歌いましたが、中には長いトロパリもあります。

たとえば「神の独生の子、並びにことばや・・・」長いですね・全部は覚えられません。そういうときには、1 回目は全文を聖歌隊が歌い、間の部分は、会衆は最後の一行だけ歌う。「聖三者の一として父と偕に讃栄せらるるの主や、我等を救い給え」をみんなで繰り返し、また最後に全文を歌いました。こういう歌い方は「聖なる神に残っています。

「聖なる神」は短いから略すこともないだろうと思われますが、今でも「光栄は」の後の「聖なる常生の者よ、我等を憐れめよ」を繰り返しますよね？これが、かつて最後だけを会衆が繰り返した名残と言われます。主教祈祷には聖歌者が歌った聖詠の部分も残っています。主教の唱える「萬軍の神よ、面を返し、天より臨み観て、斯の葡萄園に降り、爾が右の手の植え付けし者と、爾が己の為に定めし芽とを護り給え。(79:15-16)」です。至聖所の神品団と聖所の聖歌隊が交互に歌うのも、かつてアンティフォンで掛け合いで歌ったの名残と言われます。

さらに省略されて、会衆が短い附唱（リフレイン）だけを歌うようになりました。今の祭日の第 1 第 2 アンティフォンです。附唱「救世主や、生神女の祈祷に因って我等を憐れめよ」を繰り返します。

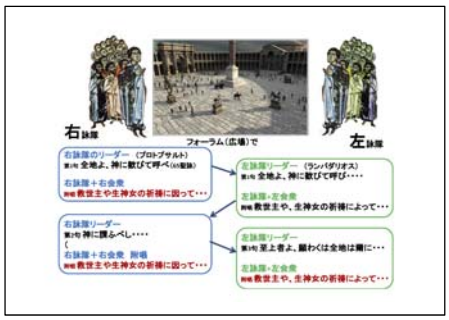
S.1 5

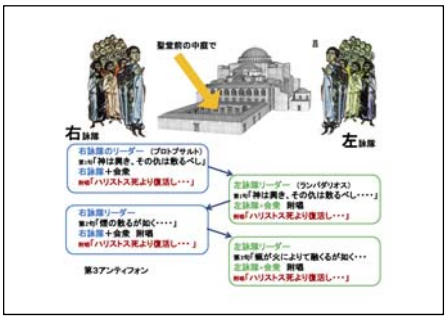
こういう歌は街の中で行列を作って歌われました。今は、十字行は教会の敷地内で行われますが、もともとは街の通りで歌われました。教義論争の時は、正しい教義を歌いながら街を歩き、正しい教えを広めました。金ロイオアンのとき、夜、歌行列を行い、灯火の列が海岸線を川のように埋め尽くしたという記録が残っています。

隊列は２隊に分かれ、掛け合いで歌いました。アンティフォンです。右、左に聖歌隊と群衆がわかれ、それぞれにリーダーがいました。

S16　S17

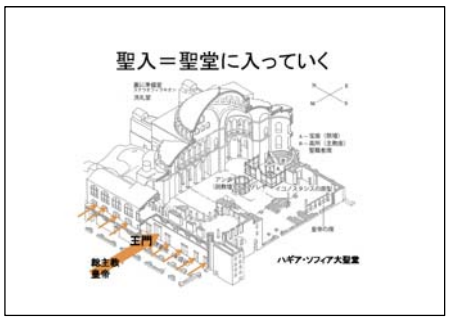
今の祈祷書（使徒経）にも左右に分かれて歌うように指示が書かれています。図解するとこうなります。まず､右詠隊の聖歌隊長プロトプサルトが聖詠の句を歌い､右聖歌隊に率いられた会衆が附唱を歌います。次は左詠隊の聖歌隊長ランパダリオスが聖詠の句を歌い、左聖歌隊と左の会衆が附唱を歌います。次はまた右、左、と繰り返します。今の祈祷書には二つずつしか載っていませんが、もっと長いものでした。





S.18

さて目指す聖堂に着くと、中庭で、総主教と皇帝が到着するのを待ちます。行列は長いですから、全部が到着するまでには時間がかかります。その間、右、左、交互に何度もトロパリを歌います。これが第３アンティフォンで、祭日トロパリを繰り返します。今の日本では聖詠の句を入れないで、祭日トロパリを２回とか３回繰り返す教会が多いですが、本来は聖詠の句をつけて歌います。



S.19

いよいよ総主教と皇帝が到着します。すると、聖歌隊長は「光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン」を歌い、終わりを知らせます。今もそうですが「光栄は」は「終わるよ～～」というサインです。

門が開くと、人々はトロパリを歌いながら一斉に、聖堂に入っていきます。神と出会う場所、聖なる場所に入っていくから聖入です。聖堂中央の門は「王門」と呼ばれ、総主教と皇帝専用の門でした。かつてハギアソフィア大聖堂にはそのほかに 54 カ所もの門があり、聖職者も会衆も一斉に聖堂に入ってゆきました。この、一斉にどおーっと聖堂に入っていく感じは復活祭の冒頭に残っていますね。

S19

S20

主教祈祷では今も、主教は第 3 アンティフォンまでは至聖所に入らずに、聖堂中央で待っています。第 3 アンティフォンで出てきた聖職者団とともに「来たれハリストスの前に」を歌いながら至聖所に入って行くのも、かつての名残です。

ちなみに、日本で日曜日に行われている形、第 1 アンティフォンに 102 聖詠「我が霊」を歌い、第 2 アンティフォン 145 聖詠に続いて「神の独生の子」、第 3 アンティフォンに「真福九端」を歌うのはもっと後の時代に修道院の形が組み込まれたもので、主の祭日に行われている「救世主や～」という附唱がつく形が古代ビザンティンの形です。ギリシアでは日曜日も「救世主や～～」の附唱を用いるビザンティンの形で行います。日曜日の聖詠は 91、92、94 聖詠で、ロシア系でも、94 聖詠の「来たれ、叩拝俯服して主に膝を屈めん」が「来たれハリストスの前に伏し拝まん」として、残っています。

S.20

トロパリは街中の歌行列から始まり、聖詠と組み合わせて歌われました。

S.22

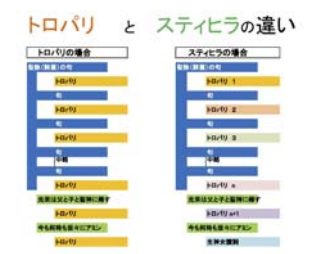
ここでちょっとスティヒラとトロパリの違いについてお話しします。聖詠とトロパリの組み方を複雑にしたのがスティヒラやカノンです。トロパリの発展形といえます。

S.23

パスハのスティヒラを思い出してください。同じ 67 聖詠「神は興き、その仇は散るべし」を歌って「聖なるパスハは今我等に現れたり」と短い歌をはさみます。詩の形はトロパリです。次の句「煙の散るが如く、爾彼らを散らし給え（67:3-4)」のあとには「福音を知らせる婦女達、来たりて見たることをシオンに告ぐべし」と、今度は違う歌が続きます。第 3 句「斯く悪人等は神の顔に因りて亡び、惟義人等は楽しみ･･･（67:3-4)」のあとには、また別の歌「香料を携うる女たち、朝早く生命を賜う者の墓に来たりて」と続きます。次の句「主はこの日を作れり･･･（117：24)」のあとも、「楽しきパスハ、パスハは主のパスハ･･･」と別の歌が続きます。「光栄は父と子と聖神に帰す、今も・・」のあとも「復活の日、我等祝いに照らされて」とまた別の歌です。

S24.

図にします。聖詠の間に同じトロパリを繰り返すのがトロパリの歌い方で、次々と異なるトロパリを入れるのがスティヒラです。これがトロパリとスティヒラの違いです。晩課の「主や爾に呼ぶ」のスティヒラであれば晩課の聖詠 140 聖詠「主や爾に呼ぶ」を歌って、



あるいは読んで、141、129、116 聖詠と読んでいって最後の方、日曜日であれば「我が霊を獄より引きだして」から後の句に 10 個のスティヒラを挟み込んで歌い、最後に生神女讃詞を歌います。
早課の「凡そ呼吸ある者」のスティヒラも日本では省略していますが、同じ仕組みで、148、149、150 聖詠の終わりにスティヒラを挿入して、最後に生神女讃詞を歌います。

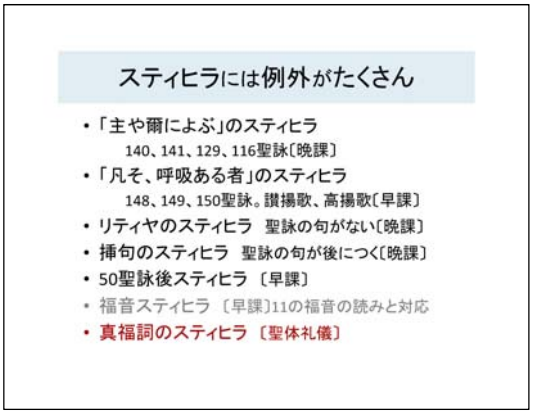
だから、スティヒラはトロパリの歌い方が複雑になったものということができます。異なる歌を入れるために、替え歌の手法が発展しました。ギリシア語の祈祷書では、どの歌を元歌にすればいいか、元歌と替え歌の組み合わせがはっきり示されています。ここから八調の歌い方が発展しました。

ちなみに祈祷書に「自調の」と書かれたスティヒラを見ることがありますがが、これは「替え歌」にすべき「元歌」とがないと言う意味なので、日本語の場合は無視して大丈夫です。

S25.

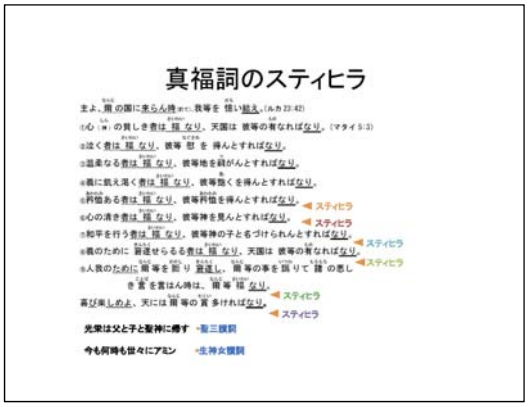
スティヒラの仲間には例外も色々あって、聖詠の句を伴わないスティヒラもありますので、とりあえずは、複数のトロパリがセットになっているのがスティヒラと覚えていただければいいと思います。

この表では真福詞、真福九端もスティヒラとでで、終わりの方に「憐れみある者は福なり」のあとからスティヒラを挟み込んで歌うのが本式です。



Slide26

こんな感じです。スティヒラはややこしいので、また日をあらためて説明します。多分、もう少し後の時代に、修道院で発達したのだと思います。



S27

今日のお話はここまでで、次回は緑のシリーズ。実習編「掛け合いのワザ」についてお話しします。今日もトロパリがアンティフォンで歌われた話をしましたが、掛け合いのワザはビザンティン伝統の歌い方で、このワザを上手に使うと、奉神礼がぐっと「いきいき」して、しかも「楽々」にできる知恵があります。

青のシリーズの続き「お名前編」は再来月に「コンダク」、聖歌者ロマンが作った降誕祭のコンダクについてお話しします。コンダクもトロパリの発展形です。

最後に、講座の時間ですが、都合で、来月からは第 3 土曜日の 3 時からに移動します。よろしくお願いします。